

ISO/IEC/JIS Plastics

事務局便り 2016年2月

ISO/TC 61/SC 2 (機械的性質) 分野の最近の動向

ISO/TC 61/SC 2は、プラスチックの機械的性質の試験方法に関する規格の制定・改正を担当し、現在までに70の規格を発行し、10のプロジェクト(規格開発)が進行中である。SC 2傘下で活動中の作業部会(WG)を表.1に示す。なお、WG6及びWG8は、SC 9国内委員会が担当しているため、本稿では取り上げない。

表.1 TC61/SC2のWG

WG	コンビナー	名称
1	ドイツ	静的力学特性
2	マレーシア	硬度及び表面特性
3	アメリカ	耐衝撃性
4	アメリカ	動的力学特性
5	イギリス	温度依存性
6	ドイツ	試験片寸法
7	韓国	疲労及び破壊靱性
8	アメリカ	データの標記方法

*幹事国：中国，議長：韓国

2015年10月5日～10月9日にインドのニューデリーにて第64回TC 61国際会議(年次大会)が開催され、SC 2関係では各WGの会議及びSC 2全体会議が開催された。本稿では、国際会議での議論を中心にTC 61/SC 2の最近の動向についてWG別に概要を報告する。

なお、2015年より、幹事国がスペインから中国に交替するとともに、議長は、韓国のDr. Sunwoong Choiとなった。

1. 静的力学特性 (WG 1)

ISO 899-1/Amd 1 (クリープ特性の求め方—引張クリープ/追補)：本追補はエージングの影響を説明したものである。追補成立の報告があった。

ISO 899-2/Amd 1 (クリープ特性の求め方—曲げクリープ/追補)：上記同様に追補成立の報告があった。

定期見直しは、**ISO 178** (曲げ試験)、**ISO 18872** (高速引張試験)の2件で、いずれも確認となった。

ISO 527 (引張試験)について、当WGのコンビナーから、昨年の会議に続いて、将来についての調査報告があり、プレーンストレーニングが行なわれた。

併せて、日本から「油圧式高速引張」に関する規格開発の提案をした。今後、規格化実現可能性の技術的な調査を行うこととなった。

2. 硬度及び表面特性 (WG 2)

WD 19278 (計装化押込み硬さの試験方法): 日本提案である本提案は, RRT (ラウンドロビンテスト) が完了し, データ解析の内容と共に, WD を作成した。WD に対するコメントを討議し, 修正を実施して, 次段階に進むこととなった。

PWI 20329 (往復平面磨耗試験): 日本より, 昨年提案した本件については, WD の内容を説明した。今後, NWIP 投票に進むこととなった。

定期見直しは, ISO 2039-1 及び 2039-2 の 2 件で, いずれも確認となった。

3. 耐衝撃性 (WG 3)

ISO 13802 (振り子式衝撃試験機の検証/改正): FDIS 投票の結果, 本規格は 2015 年 6 月 1 日に発行となった。定期見直しは, 4 件あり, いずれも確認となった。

4. 動的機械特性 (WG 4)

本 WG は, 開発案件が無いため, 休止となった。

5. 温度依存特性 (WG 5)

ニューデリー会議で **WG5** の会議は開催されなかった。

6. 疲労及び破壊靱性 (WG 7)

WD 18485 (接着された柔軟なラミネート材の剥離試験による破壊靱性の求め方): イタリアからの本提案は, CD 案が回送される予定である。エキスパートで内容確認後に, CD 投票が行われる。

NWIP 20979 (ポリエチレンの平面応力衝撃条件の下での破壊靱性の求め方に関する試験方法):

チェコからの本提案については, 投票中であったが, 結果が国際会議後に判明し, エキスパート不足で PWI に登録となった。プラスチック材料全般に適用できるようにすべきとの意見があった。

PWI 20330 (プラスチック-J-R 曲線の求め方) については, プロジェクトが一旦取消となっているため, 再開にあたり TMB での手続きをすることとなった。

定期見直しは, ISO 13586 の 1 件で, 確認となった。

また, ISO 13586 及び ISO 17281 の 2 件の追補については, NWIP の投票の結果, 新規開発を進めることとなり, イタリアが PL として, 次段階に進むこととなった。0.1mm~5mm の強化短繊維を適用できるように提案があった。日本からは, 他の規格に合わせて加工前に 7.5mm の繊維を追加することを提案した。

その他案件としては, 「異種材料複合体の接着破壊靱性 (SC13)」の新規提案があった場合の SC2/WG7 とのリエゾンについて討議が行なわれた。破壊靱性に関する規格開発ではリエゾンとなる予定である。

以上